

けとめた親鸞の仏道了解が「逆誘闡提」を軸として展開されている。

また、阿闍世と提婆の關係を通しつつ、親鸞が提婆達多尊者として仰いだ心境を、

「ひとは自らの面を見ることができぬように自らの『悪』を知ることができない。自らとらえ得たと自負する自らの悪は悉く觀念の映像にすぎないのである。それは悪とはつねに人間において『自我』への没入であり、自我の誇りを維持し続けんとする焦慮に根ざすものであるからである。自らの存立を拒否せんと迫り来る他者の行態を媒体としてのみつねにひとは『悪』の実態をとらえようとする。それゆえに『悪』はつねにわれわれにとって『他に属する悪逆の相貌』としてしか、実存しないのである。それゆえにこそ、この度し難い事実をまともに逆照する『提婆』なくしては、ひとは永劫に『自ら』に遭遇することはできない。それゆえに提婆を『尊者』と仰ぐときにのみ、つねには批判の対象としかならない悪が親鸞においてはさながらにあらわとなり、限りなく自らの内奥に消化しつつ念仏と成る。かくて提婆が『尊者』と

して讃仰されねばならぬ事由は親鸞にとって限りもなく深いのである。」

本書は、全体に互って書名が示しているように、キリスト教のユダと仏教の提婆の対比を論点としつつ、仏教とキリスト教の信仰、思想の同一点と相違点が尋求されている。主著『キリスト教と仏教の対比』(創元社)を背景とした筆者の長い思索を通しつつ、興味深いユダと提婆の人物に視点を絞った、キリスト教に照らして仏教を、仏教に照らしてキリスト教を逆対応的に、ひとつの確かめと学びの示唆をいただく書物である。

(神戸和麿)

(レグルス文庫・二四五頁・第三文明社・一九八三年十二月十日・六八〇円)

浜千代清・渡辺貞麿編

## 『日本文学』と仏教思想』

かつて「仏教文学とは何か」と題された論文集が刊行され、さまざまの視点から、文学と仏教のかかりについて議論が重ねられた。このことからわかるとおり、日本文学の研究において「文学と仏教」という問題は、常に大きくかつ重要なテーマとして存在する。

本書は『日本文学』と仏教思想』の書名が示すとおり、これに正面からとりくんだものといえよう。ここでは「仏教は、はたして文学たりうるか」という問題を、具体的な文学作品・作家を対象として検証する(序章)という方法によって、この問題を達成しようとしている。以下、そのもくじによって内容を紹介する。

第一章 因果の具現——『日本靈異記』の場合

第二章 『法華経』と国文学——原基としての説話を中心に

第三章 欣求浄土——仏教説話を軸にして

第四章 末法到来——武者の世・『平家物語』

第五章 自己を二つに裂くもの

(西行・長明・閑居友)の作者をとり  
あげ、心の葛藤について)

ここで対象とされる作品・作家は執筆した  
五人の研究者(編者の外に石橋義秀・寺川  
真知夫・広田哲通の各氏)それぞれの専門  
分野からとりだされたものではあるが、そ  
れは前掲のもくじよりあきらかなように広  
範囲におよんでいる。時代的には上代より  
中世にいたるまで、またジャンルでは説話  
文学を中心として、軍記物語から随筆・和  
歌にまでいたっている。このように内容が  
多岐にわたっており、各章の論点やその成  
果についてここでは述べえないが、たとえ  
ば第五章において、従来不明とされてきた  
西行の出家の動機について『聞書残集』の  
連歌より、その契機をあきらかにするなど、  
いずれもの章が新見・示唆にとむものであ  
る。なお末尾に「仏教文学研究参考文献」  
と「仏教文学年表(上古・中古)」が付され  
ており、至便である。

(後小路薫)

巴 (四・六版・二五八頁・世界思想社・一九〇〇)